

孫と過ごす、ほんの短い、幸せな時間を大切に——「ソフリエ」になって育児を楽しもう



NPOエガリテ大手前代表
●聞き手 編集部
古久保俊嗣さん

「ソフリエ」とは、基本的な育児方法の知識・技術を身につけたおじいちゃんのこと。NPOエガリテ大手前では、昨年からの講座を開き、受講者の資格認定を行っています。NPOのメンバーは、日本の経済成長を牽引してきた「ベビーブーマー世代」。代表の古久保俊嗣さんは、家庭を顧みてこなかった自分たち世代が、今度は積極的に育児などにかかわって、日本の子どもたちの明るい未来のために貢献したい、と話します。

みんなが憧れる、新しいおじいちゃんの姿を提案

「エガリテ大手前では、孫育ての資格が取得できる「ソフリエ講座」を開いているそうですね。

古久保 私たちは、退職したおじいちゃん世代を集めて、全国の自治体と協働で、授業と実技（オムツ替え、沐浴、昼食、離乳食作り、事故防止の対処法、おもちゃ作りなど）を受講していただき、一通りの講座を終えた人に

「ソフリエ」の認定資格を与える活動をしています。大体1カ月に1、2回くらいのペースで実施しています。「ソフリエ」は、祖父とワインのソムリエにひっかけたネーミングで、「孫のことなら何でも任せて」という子育てプロのおじいちゃんを育成します。そして文化的な薫りのする、みんなが憧れるような、新しい形のおじいちゃんのリフスタイルを目指します。パパの子育て「パパシエ」講座も行っています。たとえば北九州市では年2回ずつ実施していて、保健師さんなどが講

師をやってくれています。北九州市長が参加者に一枚一枚認定証を渡してくれているんですよ。私たちが講師を派遣することもありますが、虎の巻があるので誰が講師をやってもかまいません。手を挙げてくれたところにはテキ

PROFILE ●ふるくぼ・しゅんじ●

1954（昭和29）年、大阪府生まれ。一橋大学商学部卒。商社員として米国ニューヨーク、ロサンゼルスなどに駐在。日本および海外の多数企業で経営に従事。2004（平成16）年、NPOエガリテ大手前を設立。男女共同参画の調査研究、政策提言、研修などを行う。「ソーラーサミット1997（英国オックスフォード）米国産業代表、欧米ソーラーシリコン材料会議共同議長、一般社団法人国際ビジネスメンターズ協会（b'ma）理事長。一女の父。自身もソフリエの資格を持っている。著書に『ある軍国教師の生涯』（碧天舎）がある。

ストと虎の巻を送って、プログラムに従ってやってもらっています。テキストは1冊600円。10人の参加者が集まれば6000円で開催できます。

縄文杉のよびに たぐさんの根っこをまつ

—ホームページを拝見すると、事務所の所在地が書かれていないのですが、どこに拠点があるのですか。

古久保 よくそういう質問を受けます。「専従者はいないのですか」「電話番号は何番ですか」と。私たちは、世間一般の団体のように事務所があったり、事務員がいて、というような形はとっておりません。実は、私はエガリテ大手前も含めて共済組合、外資系のサービス会社、業界団体など、7つの会社・団体を運営しています。それらはすべて東京・銀座の事務所にとまっています。しかしそこには毎日通勤す

る義務はありません。なぜそういう方法をとっているかというと、家庭の主婦や介護、子育てをする人には、通勤が大きな負担です。何らかの事情で離島などの遠方に引っ越してしまったりは、自分のキャリアを利用できずにいます。しかしこうした方法だったら、そういう人たちも雇えるわけです。打ち合わせはインターネットでできますし、受け持った仕事をしっかりやってもらえればそれでいいのです。顔つき合わせて仕事して、毎晩飲みに行ったりって意味がない。いいアイデアを出し合ったり、議論を戦わせたり、成果を出すことにもっと力を注ぐべきです。通勤に時間をさいている暇はありません。これはノンアセットと言って、有形資産を持たずに、アイデアやノウハウなどの無形資産を重視するやり方です。機械も家具も、持っている人から借りればいい。使っていない会議室や大型テレビなんて、もつたないじゃ

ないですか。

7枚も名刺を持っているなんて怪しい人に見えるかもしれませんが（笑）、要するに、いろんなことをやったほうがいいと思うのです。1つのことだけやっている、それがうまくいかなかったときに自分のアイデンティティーが保てなくなる。心が折れてしまう人も中にはいます。机の脚は1本では立ちません。3本あると、ようやく立つけどグラグラします。でも、5本、8本、10本になると、格好は悪いかもしれないけど、ものすごく安定しますよね。屋久島にある縄文杉は根っこがぐちゃぐちゃになっていますが、でも人生は、ああいう状態になったときに素晴らしいと思うのです。

同窓会をきっかけに男女共同参画の活動がスタート

—NPOを設立した経緯を教えてください。

古久保 私は、大阪の大手前高校の卒業生です。卒業から30年目に、同窓会の当番幹事を引き受けることになりました。先輩から参加者を増やすようにハッパをかけられたこともあり、1年間、月1回、約25人の当番幹事が集まってミーティングを重ねました。当日はディズニー・シー・ホテルミラコスタで開催し、ミニーのショーなどで盛り上がり、参加者は過去最高の300人以上。大成功を収めました。しかし、祭りの後の寂しさです。それぞれが忙しい中をぬって集まっていたわけですが、たった1回の宴会のために、僕らは何をしていたのだろう。どうせ集まるなら、もっと世の中のために役立つような時間の使い方をしたい、という思いが皆の中にありました。

それから、大手前高校はもともとは女学校で、男女共同参画の意識が高く、何でも女性優先で、女尊男卑と云っていいほどの学校でした。有名大学の法

学部や薬学部などに進んだ才色兼備の女性たちもたくさんいて、私は彼女たちに再会するのが楽しみです、胸をときめかせて行きました。すると60歳前になった彼女たちは、美しいのは相変わらずでしたが、ほぼ全員が専業主婦

でした。卒業後すぐに結婚して、一回も就職していないという人もいたので、つぎ社会でバリバリ活躍しているとはかき思っていたので、とても驚きました。30年前の日本企業は、4年生大卒の女性を採用するところはほ



とんどありませんでした。考えてみたら、私のいた商社は女性活用で先進的な会社と呼ばれていましたが、まだまだ十分な環境ではありませんでした。「結局、今も昔も世の中ってあまり変わってないよね」という話になり、男女共同参画のNPOをつくらうということになったのです。それから8年。中心メンバーは57、58歳で、まだ現役で働いている人たちがばかりです。だから遊び半分。私たちは、自分たちのことを「愉快半（ゆかいはん）」と呼んでいます。

—男女共同参画から、なぜ「ソフリエ」という発想になったのでしょうか。

古久保 男女共同参画の議論を進めていくうちに、少子高齢化という問題がクローズアップされてきました。そして育児の問題です。女性は結婚、妊娠、出産などで仕事を続けるのが難し

くなる場合があります。お母さんが職を失うと生活が困るから子どもを産まない、ということも少なからずあるわけです。私たちは実態を探ろうと、お母さん世代、おばあちゃん世代、おじいちゃん世代にアンケートを実施しま

した。そうしたら、8割のおじいちゃんはお孫さんの面倒をみたいと思っいることが分かりました。そしてお母さんとおばあちゃんは、おじいちゃんに孫育てをやってほしいけど、「とても無理、任せられない」というのです。



今までやってこなかったから、信用がないわけですね。そこで育児教育をして、ちゃんとした認定証を渡して、孫育ての大義名分を立てようということになったのです。とにかく愉快半ですから、どうすれば人が喜ぶかな、どうしたらウケるかな、そういうことばかり考えています。

子どもたちには、愛情のシャワーをたっぷり

—高齢社会は、何かと暗いイメージで伝えられますが、何だか明るい気分になりますね。

古久保 私もかつてはゴールデンウイークになれば海外出張するような仕事人間だったので、まったく子育てをしなかった。あのころは経済成長に妄執して集団ヒステリー状態に陥っていたと思います。わが子と過ごす時間は、何物にも替え難い大切な時間のはずな

のに、それを全部仕事で埋め尽くしてしまった。それぞれが悔しい思いをしてきたと思います。「大事な忘れ物をしちやったよね」「あの忘れ物を拾いに行きたいよね」って思いは、たぶんみんなの中にあると思うのです。

—おじいちゃんに育てられたら、子どもにもよい影響がありそうですね。

古久保 私は「エガリテ市民大学」という宅配型市民講座で寄席風セミナーも行っており、そこでよくお話をさせていたのですが、日本昔話に出てくる「一寸法師」「かぐや姫」「桃太郎」は、おじいさん、おばあさんに育てられているんですよね。だけどお父さん、お母さんに育てられた「浦島太郎」や「花咲じい」なんていうのは、人柄はよいけれど、鬼退治や世の中を変えられることはしない。だからこれからおじいちゃん、おばあちゃんに育てられる

人たちは、世の中を変えるヒーロー、ヒロインになっていく可能性があるのです。つまり、子どもはなるべくたくさんの人に、愛情のシャワーを受けたほうが健やかに育つのです。脳みそが急激に発達する短い期間に愛情のシャワーをたくさん浴びて、安心して成長していくことが、肝心なのです。

ソフリエで生活力を培う

—特に都会では祖父母と暮らすことが少なくなりました。

古久保 ソフリエの人にお願しているのは、もし退職して家にいるのであれば、朝、娘なり息子の家に通勤することです。到着したら昨日までの申し送りを受けて、「じゃあ、いつてらっしゃい」と共働きの夫婦を見送り、孫の世話だけでなく洗濯、掃除など、家事を全部やります。昼食を作って孫と

一緒に食べたなら、今度は子どもと散歩に出掛け、買い物して帰ってきて、晩ご飯を作ってお風呂を沸かします。お父さんお母さんが帰ってきたら、今日の報告をして、「また明日来ます」といつて帰る。これを毎日繰り返します。これがソフリエの姿です。

男性は退職すると自分の居場所を失うことが少なくありません。そして妻に先立たれると、がつくりきてしまいません。独居老人は生活力がないからビールをおかずにウイスキー飲んだりして栄養失調とアル中になってしまう。掃除のしかたも洗濯機の回しかた

も知らないから、不衛生になり、ますます閉じこもって病気がちになってしまふ。こんなことがあつてはなりません。だから孫育てのついでに生活力を



養いましょう、ということですが。そんなことは男子のやることか、と思う人も一部にはいるけれど、介護などと違って、育児はほんの2、3年の期間

発声や呼吸のしかた、笑顔、表情のつくりかたといったことを教えます。次に『枕草子』や『論語』など、美しい文章を繰り返し音読し、暗誦するので。子どものころ暗記したことはあまり忘れません。「春は曙」なんて子どもときには分からないけれど、字が読めるようになって、理解力がついたら、「ああ、こういうことだったんだ」つて、すくとんと落ちるときがある。それが理解できたとき、きつと感動するに違いありません。それから弁論。みんなの前で自分が何を考えているかをしゃべります。さらに感受性や洞察力を養います。表情を見ながら「あの子どもはどう考えているんだろう。私が友達だったら、お母さんだったら、先生だったらどんなふうにいるだろう」ということを、ゲームの中で想像力を働かせ、考えていきます。

うちのメンバの九州大学名誉教授の井口潔博士が言うには、人間の脳は、

古い脳といわれている大脳辺縁系の上に、新しい脳である大脳皮質があるのですが、大脳辺縁系は10歳までの間に急激に発達します。その成長が終わると、今度は大脳皮質の成長が始まります。大脳辺縁系が何をつかさどっているかというところ、「感性」です。大脳皮質は「知性、記憶力、思考力」です。今はお受験なんかで、まだ働いていなくても、一生懸命鍛えようとしている。本来10歳までにやるべきことは、「感性教育」なのです。イクノウはすべて感性教育。これらの道具を、今「黄さんのバッグ」（教材を入れるバッグ）に、たくさん詰めておこうとしています。おじいちゃんたちには、黄さんのバッグの中から、子どもたちに大事なことを教えてほしいのです。

けつして偉そうなことをいえるような私たちがじゃないけれど、会社勤めの役割を終えた後も、少しでも皆さんの役に立てればと思っています。

限定ですからね。実行しやすいと思うのです。

男性は退職後、「家庭参画」「地域参画」「社会参画」、この3つをクリアすべきです。いきなり社会、地域に参画って言うても難しい。まず家庭の中で自分の椅子を見つけ、何かしら役に立って「ありがとう」と言われることをするのです。私は、不老長寿の秘薬は「ありがとう」という言葉だと思っています。

子どもの感性を育てる INOH（イクノウ）

ソフリエから、どんどん発想が広がっていきますね。

古久保 来年からはイクノウをやるうと思つています。学童クラブで週に一回、おじいちゃんが50分くらいの時間を受け持つて寺子屋みたいなことなのです。まず基本的な姿勢や立ちかた、

本の紹介

『祖父、ソフリエになる
—新米じいじ初めての孫育て』

NPOエガリテ大手前編
(メディカ出版)

問い合わせ

NPOエガリテ大手前
「ソフリエ・パパシエ認定講座」
「エガリテ市民大学」
問い合わせはホームページから
<http://egaliteo.com/>

